

班忠義さんと方正

奥村 正雄

班忠義さんといえば、いま日本の中国侵略戦争と性暴力に対する最も先鋭的な追及者として注目を浴びている映像作家である。しかし私が班さんに初めて会った20年前、彼はその一作で鮮烈なデビューを飾って間もない、気鋭のノンフィクション作家だった。1958年中国遼寧省撫順市に生まれた彼は黒龍江省大学日本語科を卒業。中国残留婦人の人生を描いた『曹おばさんの海』で第7回朝日ジャーナル・ノンフィクション大賞を受賞したばかりだった。私とは一面識もないその彼から、ある日突然電話がかかってきた。「会いたい」



という。私は「会いたい」理由がわからないまま、話題の中国青年の申し出を二つ返事で応諾し、千葉大学前の喫茶店で会った。そこで彼から切り出されたのは、黒龍江省に住む、ある中国残留孤児から私が預かった公証書を返してやってくれ、という要請だった。

■ 方正で託した公証書

なぜこういう経緯になったかを少し説明しなければならない。この頃私は方正やチチハルの残留婦人たちを訪ねて支援活動を続けていた堀越善作さん（故人）に誘われ、ある中国残留孤児支援組織の仕事を手伝っていた。この団体はバブルの時代に日本で汚れた仕事をする若者が払底した時期に、そうした人手不足の解決策を求めていた企業から金を出させ、いっぽう中国で帰国を切望している残留孤児、残留婦人の2世、3世を呼び寄せるといふ、欲と善意といかがわしさが混在した団体だった。1991年7月、企業の代表者を含め9人が訪中、ハルピン、チチハル、方正を回った。各地とも大勢の孤児たちが集まった。希望者と面談、それぞれ公証書を預かって後日連絡することになった。方正で応募した孤児Kさんは、該当する青年や身内の公証書を大量に預けた。貧しい孤児の生活から言えば、有料の公証書を何人分も発行してもらうのは大変な出費だったはずである。

方正はなんといっても帰国を望む孤児が多かった。そのためここで2泊を予定した。当時まだホテルはなく、方正政府の宿泊施設、招待所に泊った。ところが私と同室のTは「こんなところで2泊はできない。明日ハルピンへ帰ろう」と言い出した。理由は部屋のトイレに前泊者の残した汚物が、流されないままになっていた、それだけである。実はこのTなる男、通産省（当時）詰めのT紙記者で、お金儲けがらみの話にだけは嗅覚鋭く、このアイデアと企業オーナー集めも実は彼の主導によるものだったが、この一件でも明らかのように、残留孤児問題などはハナから彼の眼中にはなかったのだ。

こうして私たちが方正からハルピンに戻り、北京経由で帰国。ある賛同企業は中国からの帰国2世のための宿泊施設を準備するなど、受け入れ態勢が進み始めた頃、バブル経済の破綻がきて、この計画は白紙に戻さざるを得なくなり、孤児2世たちから預かった公証書などは事情の説明とお詫びの文章を入れて、すべて返送した。班忠義さんが黒龍江省各

地の孤児たちを訪ねながら方正に至る途中、会った孤児Kさんから、日本へ帰ったら私に会って公証書を返すように伝えてくれと頼まれたのは、その間のことだったのである。

この一件がクリアされた後、しばらくして班忠義さんから誘いの連絡が入った。「曹お婆さんの海」の出版記念会の案内だった。私は仲間を誘って会場の後楽園・函徳亭へ出かけた。会場には小川洋子さんも顔を見せていた。酔いが回った頃、班さんが私に何か話せと言う。「班さんとの出会いは敵としてでした」と言い出したら律儀な班さんはあわてて「いや初めから敵などではなかった」と応じたことを覚えている。

■ 「孤児」から「性暴力」へ

その後、中国残留孤児問題は日本人の支援組織がさまざまな形で取り組んでいることを見届けた彼は、一転して日本の中国侵略戦争時の性暴力を白日の下に晒し、今も貧窮と病魔に苦しみながら過去を口にできない被害者の救援に山西省の黄土高原の貧しい村々をかけずり回り始めた。同じ中国人でも東北生まれの彼には山西の訛りは聞き取れないことが多かったという。それより何より、同じ村人にも過去を隠している老婆たちが、東北から来た見知らぬ男に、周囲の誰にも言わなかった自分の過去を、気安く語りだすはずがなかった。班さんは同行した知人の女性を間に立て、何度も訪ねては、やがて病んだ老婆たちの固く閉ざした心の扉を少しずつ開いてもらっていった。あるときは朝鮮出身の、同じ境遇の女性が、死ぬ前に一度祖国朝鮮の故郷の村へ帰って、身内にもう一度会って死にたい、というので、カメラを回しながら韓国へ同行した。老婆は悲願を果たしたが、もう再び中国山西の仲間の元へ戻る力はなく、息絶えた。こうして山西省の山間の村を訪ね歩くうち、彼女たちと同じ運命をたどったひとりの女性の存在を知る。美女だっただけに受けた凌辱も他の比ではなく、晩年、誰にも省られることなく死んでいった彼女の異名「蓋山西」（山西省一番の美女の意）からタイトル名をとった『ガイサンシーとその姉妹たち』（本と映像）で、班さんはその全貌を明らかにした。

従軍慰安婦に償うとした政府主導の「女性のためのアジア平和基金」が、そのまやかしが明らかになるのとは対照的に、班さんの行動と訴えが当然ながら人びとの心をとらえ始めて行った。今から10年前にできた「中国人元慰安婦を支援する会」（責任者・中島俊江、電話042-323-7729）の元にカンパや励ましの声が寄せられている。しかしまだ足りない。中国ではシーサンシーの姉妹たちの残る寿命がわずかになってきている。ひとりでも多くのシーサンシーの姉妹たちにお詫びと償いの気持ちを届けなければ、私たちはいつまでも歴史の債務者であり続けなければならないのではないか、と思う。

こうした日本の侵略戦争の性暴力の犠牲になった中国人女性を、山西省の山間僻地で、探し出し、病院で治療させ、証言を聞き取る作業は、日本政府への配慮から中国の行政も対応は冷たい。この名乗ることもできずに、ぼろぼろになった老いた犠牲者に会い、入院させ、戦争の真実を明らかにする班さんの行動を支援する輪が、今から10年前にできた。

「中国人元慰安婦を支援する会」（責任者・中島俊江、電話042-323-7729）である。

<おくむら・まさお：本会・参与>